経済コラム

36

20 世紀前半の日本史を読み返して

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト　土田　浩

前回の経済コラムでは、世界史の高校教科書を題材にしたが、今回は、日本史を取り上げたい。

日本史を学ぶとき、どうしても複雑な気持ちになってしまうのが、日露戦争勝利（1905 年）から太平洋戦争敗戦（1945 年）に至る時代の展開である。

産業革命によって経済力は飛躍的に向上し、大正デモクラシーに代表されるような民主化も進んだ。列強諸国に仲間入りするなど、国際的なプレゼンスも一躍高まった。一方で、不況期を迎える度に財閥による寡占化が進み、農民や労働者の生活が困窮した。民衆運動が過激化し、これを抑圧する法規制が強化されていった。政権が弱体化・短命化し、要人の暗殺が相次ぐ中で、世論・マスコミの支持を得た軍部が台頭した。韓国や満州を経済支配圏に取り込む動きが活発化し、諸外国との間で緊張が高まった。

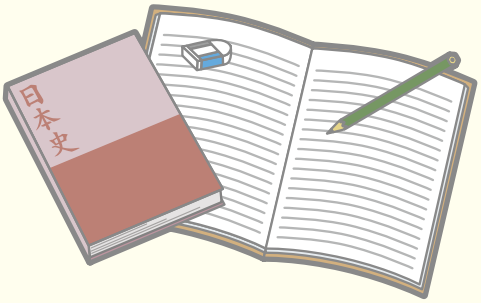
皆がそれぞれの正義感に基づき、熱情的に燃え上がり、エネルギッシュに行動した訳だが、その結末が分かっているだけに痛々しい。どこで何を間違ってしまったのか、いつ何を捨てて引き返すべきだったのか？

加えて、私の幼少期の原体験。父母・祖父母の雑談は、長引くと必ず戦時中の苦労話であった。駅前の傷痍軍人のアコーディオンの物悲しい音色も耳に残っている。テレビドラマでも戦時中の悲惨な場面によく出くわした。若い時分の私には、感情を揺さ振られる、目を背けたくなるような暗い歴史であった。

と同時に、そうした辛い話の大半は、長い戦時下の最後の 1 年の出来事だったことにも気付かされた。1937 年の日中戦争勃発、1941 年の対米開戦からは随分経ってからの話だ。生活物資の不足、軍需生産への動員、思想統制といった非常時ではあったが、そうした中でも、国民生活の多くは、長らく歯を食い縛りながら続けられていた。それが、最後になって想像を絶する悲惨な状況に暗転したのだった。

翻って現在、新型コロナウィルスが引き続き猛威を振るっている。政府、企業から、家庭、個人一人ひとりに至るまで、未曽有の大胆な見直しを迫られ、我慢も続けている。多くの日本人が、激流下りの真只中にいる。

だが、今どんなに苦労や我慢をしているからと言って、先行きに予断は禁物である。目の前には、滝が迫っているのかも知れない。仮に、世の中がパニックに陥ったり、世論があらぬ方向に展開したとしても、冷静な判断と行動ができるよう、心の準備だけはしておきたい。そのために必要なのは、最後に守るべきものは何かという究極の選択であり、捨てざるを得ないものは潔く捨てるという覚悟である。

今日ほど、こうした思考訓練が大切な場面はないように思える。将来を悲観視する積りは全くないのだが、正直、頭の片隅では、取り返しのつかない事態が起きないよう祈る気持ちもある。いま予防線を張っておくことに、意味があると感じるのである。

最新の日本史の高校教科書（山川出版社「詳説日本史」、2016 年 3 月 18 日文部科学省検定済版）の記述は、第 2 次安倍内閣発足（2012 年）までで終わっているが、その後の日本史のストーリー展開に責任を負うのは、我々世代なのである。